

哲學研究

第二百四十二號

第二十一卷
第五號

地域的社會圈としての故郷と郷土（承前）

白井 二尚

八

郷土成立の條件を優れて充す地方及び時代の考察は、自ら郷土と都市及び田舎との聯關の問題に導く。而して此の問題に於ては、地域的封鎖及び狹隘といふ郷土の空間的限定に伴ふ、郷土の特定なる時間的契機が、特に注意されなければならない。此の郷土の時間的契機は、郷土の地域内にあるものゝ變化に存する。先に述べた如く地域的封鎖及び狹隘の存する所では、此處にあるものがその地域の外にあることによつて此の地域から去り、また此の地域の外に在るものが此の地域の内に入るることによつて、此の地域に新たなものを増すことがない。即ち斯る地域に於ては、時の経過にかゝはりなき恒定性と、時の経過と共に一度去つたものも亦戻り來る反覆があるのみであり、従つて此處に於てあるものとの交渉にも、恒定乃至反覆が見られるのみである。此の恒定及び反覆に條

件づけられて、其處にあるものに馴れ親しみ、之を扱ふに巧みにして勞少く效多く、又之を愛好するといふ郷土的なる交渉把握が、可能になるのであるが、然るに斯くの如き條件の下に行爲交渉の行はれるところには、自ら慣習が成立し支配する。テンニースは習慣 (Gewohnheit) に就いて次の様に論ずる。即ち、人が慣れて居ることは、その人にとつて通常正さにその馴れて居ることの故に「可なり良く」感ぜられるやうになつて居る。その中でも最もその度の進んで居ることを彼は愛好さへもし、心からそれに愛着する。彼はそれを保持し擁護せん事を願ふ。又習慣は常に苦痛苦勞勞働を軽くするのみならず、また一定の營みや行ひを強ひる。それは欲求と等しくなる。吾等が併し爲す習慣となつて居ることは、吾等は初め習得し修鍊しなければならぬ。而して練習即ち屢々なる反覆こそ、吾等がそれを最後には「ひとりで」反射的に敏速且つ容易になすことを實現するのである。故に習慣乃至練習は、人が一般に何事かを爲し得ること或ひは又彼が何事かを比較的僅少な努力又は注意を以て爲すことの原因である。^①斯く習慣について言はれるところは、直ちに移して郷土的なる行爲交渉に就いても言ひ得られる。斯る習慣が單に個人的なるに止らず、特定社會集團成員に共通であり、その成員が齊しく之に従ふ意味に於て、その集團の社會意志である場合に、之をテンニースは慣習 (Site) と呼ぶのである。故に慣習の支配する所には郷土的なる行爲交渉があり、従つて郷土があるべきである。

慣習は立法の如く特定の決定裁決によつて作られるのではなく、常に人が實行するところから成立するものであり、傳統傳承に基づくものである。此の事によつてそれは溯つて過去を指示する。即ち祖先が斯く考へ斯く行つて來たといふ事實が、通常その決定的な基礎となる。此の意味に於てローマ人は祖先の慣習 (*mores majorum*) なる言葉を合成し、又ドイツの一歌謠の中には、「親々の聖き習俗 (*Branch*) に忠實なれ」と歌ふのである。一つの慣習もその起源を尋ねるならば、果てしなき過去の世代の系列を溯らなければならぬであらう。「それは極めて古い慣習である」又は「昔からその通りであつた」とは、常に慣習に就いて言はれるところである。昔からのものが喪はれて新たなるものが之に代り、舊きものが破られ改められるところには、慣習は成立し得ない。それは只恒定と反覆のある所即ち封鎖狹隘なる限定を有する地域のみを、その本來の場所とするのである。

此の地域的限定と慣習との聯關は、更にまた宗教特に死者乃至祖先の禮拜に於て、明瞭に認められる。舊きもの長く慣行され來つたものゝ支配を本質とする慣習に於ては、最も高齡なるものが最も長く之を慣行し來り、最も之に習熟精通して居るが故に、慣習に従ふことは、高齡者長老に従ふことである。故に高齡者に對し畏敬を抱きまた表はすことは、慣習の本質的な掟に屬し、慣習の強く深く作くところでは、此の掟は慣習の核心に包藏されて居る。然るに、いま斯く畏敬される年長

者が死ぬ場合には、人はこれに飲食物を供へるのであるが、これは死者も猶生活と活動とを續けて居るものとして表象されるが故であり、飲食物のみならず、同時にまた生時に捧げた畏敬をも捧げることは極めて自然である。斯くて此處に死者の靈に對する畏敬が生じ、従つてまた祖先崇拜が生ずる。祖先を崇拜するものにとつては、慣習は靈の大切な習はしであり、従つて此の祖先の道乃至風を改めることなく守ることを自ら伴ふ。他方また此の祖先の靈は自己の愛好せる信仰や方式からの如何なる背反をも、憤り罰せんとするのが當然であり、従つて社會組織の族長制の段階に極めて一般的なる、慣習の盲目的な固守は、祖先の靈への畏怖によるところもあるのである。此處に早期社會に特有なる、大抵の慣習に伴ふ半超自然的賞罰の觀念が生ずるのである。而して慣習古きに従つて、人が之に従ふことを自己の關心事とする靈愈々多きを加へ、従つてまたその古きことまざるにつれて、その強制支配の力も愈々強くなる。^④斯くて慣習の支配は死者の支配とも言ひ得られ、テンニースは故に、死者の禮拜は全く特殊な重要性ある慣習であり、慣習中の慣習と呼ぶことも出来ると言ふ。^⑤

慣習と祖先との此の緊密な結合の根柢には、死者に對する畏敬畏怖が存し、またその基礎には死者も猶何等かの形で生きて、生者の邊に居り生前の如く衣食するものとして表象されることが存在するのであつて、此の事は更に日夜接して居た死者の姿行動の具體的直觀的なる憶起表象を基底と

し、之の想像的變容附加によつて、死につゝも猶共に居る死者の表象が、ツントの所謂神話的思惟の内容となつて、敬愛畏怖等の強い情緒を伴ふことを前提とすると考へられる。特に死者の中でも、日頃最大の權威を有して居た父母たる長老高齢者は、最も長く同一地域内の他の成員の交渉の對象となり、従つてまた最も直觀的具體的に記憶されて居る者である。故にその直觀的生動的なる憶起表象が、その生前にも増す敬愛畏怖を生せしめ、古き慣習の支配を維持し強めるは極めて自然である。斯くの如くにして死者特に祖先の禮拜と之に基づく慣習の支配は、死者の表象可能を根柢に有つのであるが、此の表象可能性が社會集團の地域的限定の上に立つことは、既に詳論した如くである。以上の如くにして慣習が老人の支配また死者乃至祖先の禮拜を、最も重要なものとする事は、慣習が社會の封鎖狹隘といふ地域的限定と、如何に不可分離的に結合して居るかを明瞭に示すものであり、此の地域的限定を基本條件とする郷土と慣習との結合も亦、改めて論ずるを要しないであらう。

慣習と郷土との結合は、女性と慣習との結合によつても亦窺ふことが出来る。テンニースによれば、慣習は女性に對する明白なる偏愛を有する。而して此の愛好は女性によつて應へられる。即ち女性と慣習との間の愛好關係は、恰も老人と慣習との間と同様に相互的である。^⑥ ジムメルも亦女性と慣習との結合を認めて次のやうに言ふ。女性の本質に慣習は皮膚の如く附着する。男性にとつて

は種々限りなく慣習外に存在する自由を、女性は慣習の中に見出す。何となれば自由とは確かに、吾等の誓みの法則が、吾等の本性の表現であるのを言ふのであるから。⑦ 慣習と女性との此の結合は強者たる男性がその卓越せる力を恣意的に、一般的通則的な生活形式に反して利用することを慣習が妨げ、他方弱きものなる女性は、一般的なる慣習に合し、之によつて強者の恣意から庇護されんとするといふ事情にもよるであらうが、⑧ 此の外に猶女性が農耕に従事しまた家を守つて、同一地域に居るが故に、その地域に特有なる慣習を純粹にまた強く保持するといふ女性の地域的限定にも基づくのである。女性が法律によつて守られること少ければ少い程、慣習は益々女性の爲めに作くことは、例へば英國に於ては女性は、近年まで殆ど何等の權利も與へられなかつたが、しかもそれにもかゝはらず、英國は「婦人の樂園」とされて居たことなどに於て明瞭である。テンニースは此のこの原因を、女性が慣習を保持するが故に、諸々の舊き状態を憶ひ起さしめることに求めて居る。⑨ ロッスも亦女性の狭量と傳承的なることを指摘し、そのよつて來るところは家庭の四壁内に閉ぢ籠められて居ることにあるとする。⑩

祖先崇拜及び女性と慣習との結合聯關によつて、郷土的地域限定と慣習との結合聯關の緊密なることは充分に證明された。一般に慣習が支配することは、郷土乃至故郷の存立の條件の存在することを示す。逆にまた慣習の支配の衰へる所には、郷土乃至故郷の成立條件の缺損が推定される。斯

くて端的に云ふならば、慣習の支配する所は即ち郷土乃至故郷の在る所である。また慣習の存せざる所には、郷土乃至故郷も亦成立しない。然らば慣習なき所に於て之に代るものは何か？ 慣習を驅逐しその位を奪つて、支配的勢力を振ふものは何であらうか？ それは即ち流行である。慣習に對立するものとして風習 (convention) が擧げられることもあるが、流行は風習の慣習に對して有する特性を、更に鋭くしたものと見ることが出来るが故に、此處には廣義の流行を慣習に對立せしめるのである。流行を特に慣習との聯關に於て考察する時、此等兩者は多くのものを相互に共通にし、多くの特質に於て類似してゐる事が知られるのであるが、就中今此處に重要なものは、流行も亦社會意識乃至社會意志の一つであることである。即ちそれが特定行爲交渉の仕方様式を、人間に課するものなることは、mode なる言葉が元來 modus から來て居ることによつて明かである。流行が慣習から區別される根本的特質は、その時間的契機の特異性に、即ち傳承された範型を不變に忠實に再現する眞の慣習よりも、流行は正さにより變化し易く、趣味の變遷を持つといふ點に存する。流行は特に次の如き判斷、即ち、認められ氣に入られる爲めには、新しく特別でなければならぬ、又一番新しいものが常に興味あるものである、而して認められ氣に入られんと欲する人は、常に新たに又新鮮らしく見えなければならぬといふ判斷を根柢とするのである。^⑩

ジムメルは流行の本質を構成する二つの契機を認める。その一つは模倣の契機であり、他の一つ

は區別の契機である。彼に従へば先づ模倣は所與の範型の模倣であつて、個人を萬人の行く軌道に導き、各個人の舉措を單なる例とする普遍的なるものを與へる。¹⁸⁾これ即ち流行の社會意識の側面であつて、人が自ら特定の様式を模倣することによつて、多數人に共通な様式の支配が成立するのであるが、然らば如何なる様式が模倣されるのであるかと云へば、それは新たな様式である。然らば何故に新たな様式が模倣されるのであるか？ 此處にジムメルが流行の本質的契機の第二のものとするところの區別の契機 (Abscheidungsmoment) 又は差異の欲求 (Unterschiedsbedürfnis) が作くのである。¹⁹⁾此の第二の契機によつて、一般的なるものから分化し卓出せんとする傾向努力が現はれる。新しからぬものは模倣によつて既に行き互つてゐる場合、一般から自己を區別せんが爲めには、未だ一般化されざる新たなものを採らなければならぬ。然るに新たなものも模倣され、ば直ちに一般的になる。故に一般的なるものから分化し卓出せんが爲めには、今既に一般化されたるものを棄て、更に他の新たなものを採らねばならない。斯くて模倣の作くところに區別を求める時は、常に舊き従つて一般化されたるものを棄て、新奇なるものを採ることを繰返さなければならぬ。斯くて不斷の變化交替が此處には必然的である。流行に就いての如上のジムメルの所説は、一般の見解を代表するものであつて、例へばロツスの如きも、流行の特質を、反覆的な變化、律動的な模倣と改新、交替的な整一と變化、交互的な擴張と收縮等の言葉を以て表はし、²⁰⁾

また流行を構成するものとして模倣と分化とを擧げて居る。^⑮

流行の出發點たる新たなものは、社會集團の如何なる部分に如何にして現はれるかと言ふ問題も、流行の究明にとつては重要な問題であるが、之に就いての論述は他の機會に譲り、今は只慣習及び郷土との聯關に於て、直接重要性を有する變化交替の契機のみに着目すれば、流行の本質は、常に只集團の一部が之を實行し、全體は併し之への途上にあるといふ事に存するとも言はれ得る。それが完全に行き互るや否や、即ち元來只若干のものに存したに過ぎないものが、やがて全ての人々によつて例外なく行はれるや否や、人は最早それを流行とは言はない。流行のあらゆる成長は、それが正さに差異性を滅するが故に、それ自らを驅つてその終息に赴かしめるのである。流行には最初からその都度の各々のものが、集團の總體を自己に服従せしめざれば息まざるが如き擴延の衝動が内在する。併しながら此のことが成就される其の瞬間に、それは流行としての自己自身の本質に對する論理的矛盾に於て死ななければならぬ。何となればその一般的普及は、その中にある區別の契機を滅するが故に。^⑯斯くて現はれては滅びまた現はれてまた滅びる、此の現滅の交替が即ち流行の本質である。しかもその現はれてから滅びる迄の時間が極めて短い。それは同時的なる發端と結末であるとさへ言はれる。流行の問題とするは、存在か非存在かに非ずして、存在にして同時に非存在である。それは常に過去と未來との分水嶺に立ち、自己の頂點にある間は、極めて強い

現在感を與へることに於て、比類なきものである。何か新しくして突然廣まつたものも、若しもそれがその後長く續くことが信せられるならば、人はそれを流行とは呼ばないであらう。只その出現と同様に速かなる消滅が確信されるものゝみが、斯く呼ばれるに過ぎないのである。¹⁷⁾

慣習に於ても模倣は本質的契機である。けれ共慣習には區別差異の契機が缺如する。故に舊くして一般的なるものは、棄てられる事なく其の儘に保持され傳承される。否却つて舊きが故に、持續せるが故に、保持され傳承されるのである。然るに流行には、慣習には缺如する第二の區別差異の契機がある。此の第二の契機こそ眞に流行特有のものなるが故に、多くの人々が之に着目して、之を不等を求める情熱、又は自己を他人から目立たしめんとする渴望等と呼び、また流行の究極の存在理由を、自我の個別化 (self-individualisation) への熱望とするものもある。¹⁸⁾

此の契機の故に、流行も慣習も齊しく社會意識乃至意志でありながら、前者は後者とは反對に、持續傳承を破棄することによつてのみ可能なる交替變化を、本質的構成要素とするのである。此の點よりして両者は正さに相互否定又は相互反對の關係に立つ。一の成立する所には他は影をひそめ、他の支配的なる所には一は衰へなければならぬ。而して慣習は郷土と前述の如く結合して居るが故に、流行の旺んなる所には郷土の成立し難きことは免れ難い。然らば抑も慣習は如何なる所に支配的であり、流行の旺んなるは如何なる所であらうか？

今右の問ひに對して端的に答へるならば、慣習の支配的なるは田舎であり、流行の旺んるは都市である。此の對立を成立せしめる因素の種々ある中でも、特に主要なるは交通である。文人が地方色を探し求める際は、カルバーテン山脈やバルカン地方に赴くと言ふのも、山地が孤立的になり易く従つて、舊慣の存續の著しい事を物語るものがあるが、一般に交通が發達せず、また人間の希求するものを多く供給することによつて、人を吸収す可き理由を持たぬ田舎に於ては、人間の出入が繁くないが故に、各々の地域以外から新たなものが輸入されることが少い。斯くて田舎に於ては、交渉の對象及び仕方の變化が極めて限定され、慣習の成立す可き恒定反覆の條件を充して居る。之に反して都市は、全ての人間に向つて開放されて居る。第一に都市はその地域の狭小にもかゝらず、その狹隘なる地域内に多種多様なものが密集して居る。従つて既に靜的に考察しても、此處に於てあるものと、多面的にして細部に互る個別的な交渉を持つことは、殆ど不可能に近いであらうが、更に進んで此の多種多様なものゝ變化と、之との交渉の仕方の變化とを併せて、動的に考察するならば、慣習の而してまた同時に郷土の成立に對する根本條件たる、限られたる對象との一定の交渉反覆の持續が、都市に於ては如何に不可能なるかは直ちに明かである。此の都市に於てあるものは、あらゆる遠隔地方から集合して居り、又あらゆる地方に分散して行く可き可能性の下に置かれて居るのであつて、此のことは、只に物貨の集散に就いて云はれ得るのみならず、人間

の地域的移動の調査によつて、極めて明瞭に示されるのである。斯くて都市は、その内に於てある人及び物が、其處より來り或は其處に向つて行く可きあらゆる地方に迄、その交渉範圍を及ぼして居るとも云ふ可く、都市の空間は此の交渉範圍の全部に互ると云ふことが出来る。此の廣い空間の内部の、如何なる部分に於て生ずる變化も、全てやがて都市に齎らされて、其處に變革を惹起するが故に、都市の變化は極度に繁くならなければならない。忽ちにして現はれ忽ちにして没して行く都市に於てあるところのものに、一定の交渉を持続的に行ふことは不可能であり、従つて此處には慣習の成立は望む可くもない。慣習に代つて都市の生活を支配するものは、即ち變化を本質とする流行である。凡そ變化の頻繁は對象物の速かなる廢棄を意味し、それはまた著しい浪費を意味する。然るに浪費の規範が命令的に自らを現はすのは、大なる近代的文明都市に於てあることは、ヴェブレン等によつて、早くから指摘されて居るところであり、⁽²⁾これ即ち流行が近代大都市に支配することを指示するものに外ならない。

殊に大都市は、全てのより狹隘な環境の反對に、多くの人の指示する如く、印象及び關係の交替の不實な迅速 (*trenlose Schnelligkeit*)、水準化及び之と同時的な個性の尖鋭化、聚合と正さに之によつて不可避的ならしめられる餘所々々しさと離隔等によつて、流行の養育地となるのである。⁽²⁾斯くて假令人がその幼少年時代を、一定の大都市内に過しても、此處に支配する流行に表現されるが

如き、此處に在るものゝ變化交替は、此處に在るものゝ複雑多様性と共に、此等のものゝ多面的具體的直觀的瞭解把握、また此等交渉の對象との *vertical* な關係を、不可能ならしめることによつて、郷土従つて故郷の成立を不可能ならしめるのである。

流行の支配によつて窺はれるところの、大都市に在る交渉の對象の交替變化は、大都市が此處に幼少年時代を送る者に對して、郷土従つて故郷となり難いことを物語るのであるが、大都市はまた此處に生活する交渉の主體の側に於ける移動變動よりして、郷土乃至故郷とは成り難いのである。大都市に定住する者にとつても、既に住宅と勤務先商業區域娛樂區域等との間の、日々の往復は、その都度全く異なる對象界に出入せしめるのであるが、併し同一都市内部に於て、更には一都市から他の都市に轉住する者に對しては、對象の變化は流行に於けるが如く部分的に止らず全般的である。幼少年時代には、自己の行爲様式が確立せざる故、新たな様式を採り入れる事は比較的容易であるとは言へ、之も短時間には完成し難く、従つて此の時代と雖も、只その一部を過したに過ぎない土地は、眞の郷土とはなり難い場合が尠くない。即ち幼少年時代に轉住を行ふ者は、假令夫々の居住地に在るものゝ變化交替は大ならずとするも、夫々の地を自己の郷土たらしめる事が困難である。此の困難は轉住を一再ならず行ふ者にあつては、特に著しい事は言ふを俟たない。しかも一度轉住することは、更に第二第三の轉住の可能性を開くものなることも亦、併せて考慮されなければ

ばならない。斯くて幼少年時代に轉住を行ふ者、特に之を重ねる者は、何れの地域をも自己の郷土とすることの出来ない無郷者とならなければならないのである。

然らば定住は何處に行はれ、郷土は如何にして成立するのであるか？ それは人類が自己の移動と共に携へ運ぶこと能はざるものによつて、一定の地域に結合されることを前提とする。而して携へ運ぶこと不可能なるもの、最も重要なものは、過去に於ては蓋し不動産と呼ばれるもの、主位を占める耕地であつた。即ち人類は農耕によつて、眞に決定的に定住するに至つた。土地を耕すことによつて之に結合され、土に親しむことによつてその生活を營むことに、郷土の起源は存する。此の土地と郷土との根本的結合の故に、郷土を荷ふ郷土の土が、郷土の表徴となるは極めて自然である。此の點よりして例へば先に述べたホヱ族の、旅に郷土の土を携行する慣行の如きにも、深き意義が見出されるのである。また郷土なる言葉が、土をその主要構成要素として有つことも、決して偶然ではないであらう。農耕を媒介とする人と土地との結合は、人類の定住以來今に至るまで存續する。農耕の行はれる所は常に人間の定住する所であり、従つてまた常に郷土の成立する所である限り、農耕の行はれる所たる田舎こそ、郷土成立の場所でなければならぬ。

都市人は田舎人よりも移動性に富む²⁹。此の主體の移動性のみよりしても、郷土が大都市には成立し難い事は明かであるが、然るに猶此の上、先に述べた交渉の對象の變化交替の事情が加はること

によつて、都市に生れ都市に育つ者が多く無郷者となることが、極めて高度に蓋然的になるのである。住民の地域的移動に基づく都市と郷土との關係は、人口統計によつて明瞭に窺ひ知られる。ゲオルク・フォン・マイアーその他の統計によれば一九世紀末に於ける歐洲大都市の、出生以來の定住者は、全住民の四〇%を越えるに過ぎないが、田舎に於ては、出生地居住者が九〇%に及ぶ²⁴⁾。而して都市移入者の割合は益々増加する傾向が見られる²⁵⁾。又其の後或る者は、幼少年時代を都市に於て過す者の中、同一地域内に居住せる者の數を、都鄙別に調査して、都市三七%に對し、田舎七六%なる結果を得た。ミュンヘンの如き寧ろ中都市とも言はるべき都市と、より小なる田舎都市とを比較しても、前者に於て就學以來同一の家に居住せる小學生四四・二%に對して、後者のそれは六二・六%であつた²⁶⁾。此等の例を以てしても、人間の移動は、都市の大小に比例し、田舎に於て最も小なることが實證されるのである。我國最近の小學生の轉校率を調査するに、勿論各地の交通關係産業事情等によつて、種々相異なるけれ共、大體に於て都市の毎年轉出入者は、全生徒數の一三%以上であるに對し、田舎は二乃至五%に止るのを見出す。斯くの如き都鄙の差は、それが毎年積み重なる時、如何に増大し行くか、従つて出生以來同一都市に居住する者の數の、如何に僅少なるかも、自ら明かである。斯くの如き人間の地域的移動によつても、郷土従つて故郷は、その本來の成立の場所を都市には有たず、只田舎にのみ持つものであることは明かである。故にレンニースは、

大道を居住地とするチゴイネルが、居住なる言葉を有せず、また動詞の未來形も有たないことを指示し、斯くの如き無郷性を、路上の生活と大都市の生活とは、互ひに共通にすると言つて居る。⁽²⁶⁾

但し郷土の成立を容れざるは、近代的大都市であつて、中世紀以來の長い歴史を持つ中小都市には、猶幾多の舊きものが殘存し、愛郷心の一なる愛都心も、見ることが出来る。例へばケルン市の如きはその例であつて、その市民は多く定住的であり、同時に自分の都市の熱心なる讚美者である。⁽²⁵⁾ また大都市に於ても、郷土の一般的基底たる封鎖性固定性が、何等かの形に於て或る度まで實在する限りに於て、郷土的なるものが成立し得る。昔ながらの建物の並びや、之に住む人々の累代の定住、夫々父祖以來一定せる職業、傳統的な年中行事、舊態を保つ並木や河岸の風物等が相寄つて、一種の郷土的なるものを構成する。例へば大都市内の村落とも言ふべき所謂「町内」の如きものであらう。此等過去の要素が破壊され、建物や家系や職業の改新交替が多くなるにつれて、大都市内に於ける郷土的なるものは、その存在の影を薄めて行くのである。

大都市はその面積に於ては狭小であつても、それに於てあるものゝ複雑性の故に、その狭小なる面積を更に狭小に區劃限定して、初めて特定小數のものに就いて、多面的にして細部に互り、直觀的にして個別的なる了解把握を持つことが可能になる。大都市の居住者も、都市の内部に此の狭く限定された生活地域を劃することによつて、熟知しうとましからぬ了解交渉の對象の於てある場所

を作り、此處に寛ろぎと安らぎとのある生空間を見出さうとする。これ即ち大都市の中にも人は自ら自己の郷土を作らうとするのである。諸々の優れた交通の可能性を有する近代大都市に於ても、二つの市區の間の狭い地帯や、線路の踏切りや、橋の架けられて居る溝渠等が、心理的に越えるのを好まれない境界の作きをなし、また多くの人々は自己の市區の中を半時間駈る事の方を、僅かの何もない土地を十分間横切つて行く事よりも好むと言はれるは、如何に人が大都市の中にも自ら近隣社會また之を基とする郷土を作らんとする傾向があるかを、示すものであらう。

セーヌ河を渡るのは、以前のバリー人にとつては、今のイギリス人がドウヴァーの海峡を越える位にも感ぜられて居たと云はれる。⁽³⁰⁾これは管にセーヌを渡ることが容易でなかつたと云ふ事にのみ基くのではなく、大都市を自然的境界に従つて區劃し、自己の寛ぎ安らぐ場所を作り出さうとする傾向と、斯くて作られた寛ぎ安らぎの場所から外に出て、煩雜緊張不安を経験する事を嫌ふ傾向とから、現はれた現象と見る可きであらう。セーヌ左岸のものは其處を己が郷土とし、右岸のものをひそやかな輕侮を以て扱ひ眺めたといふのも、自己の熟知し馴れ親しめるものを愛好尊重し、之の存在せざる場所に於てあるものを嫌ひ貶下せんとする、自らなる心理の現はれと見ることが出来ると思はれる。併しながら斯くの如き郷土への欲求と郷土への愛着との故に生じたバリーの二分も、メトロの發達によつて弱められたと言はれる。⁽³¹⁾これ地下鐵道の四通發達は、セーヌなる自然的境界

を破棄して了つたので、何れの側に住む者の生空間も、地下鐵道の及ぶ範圍に迄擴大され、バリー内部に於ける郷土、従つて郷土一般を喪失するに至つたのであると思はれる。然るにもかゝはらず、今も猶バリーの中に、自己の狭い生活地域を劃さんとする人は跡を斷たない。「バリーは大きい。けれ共巴里の中に私は私の村を持つて居る。殆ど全ての人のやうに私も小さな郷土 (patrie) しか持ち得ない。世界中を駈け廻る人は、あらゆる束縛から解放されて居ると信するけれ共、貴方は、彼等も彼等の船の中甲板や汽車の車室の中に、一つの郷土を臨時に作らずには居られぬと云ふ事を信じませんか？」この簡單な言葉は如何に人が煩雜にして開放的な大都市の中にも、田舎の「村」に特有なる如き單純反覆を可能ならしめるべき小天地を劃して、其處に郷土を作らんとする傾向を持つか、更に又凡そ郷土は、如何に地域的限定を本質的基礎とするものであるかを、極めて直截適切に表現するものであると云ふ事が出来るであらう。

① F. Tönnies, Die Sittē, 1909, S. 8 f.

② *Ibid.* S. 17 f.

③ *Ibid.* S. 20.

④ E. A. Ross, Social Psychology, 1925, 15th ed. p. 199, 217.

⑤ Tönnies, a. a. O. S. 21.

⑥ *Ibid.* S. 36.

⑦ G. Simmel, Philosophische Kultur, 1923, S. 96.

- ② *ibid.* S. 41.
- ③ Tönnies, a. a. O. S. 41.
- ④ Ross, op. cit. p. 230 sq.
- ⑤ Tönnies, a. a. O. S. 41.
- ⑥ Simmel, a. a. O. S. 33 f.
- ⑦ *ibid.* S. 34, 37.
- ⑧ Ross, op. cit. p. 94 sq.
- ⑨ *ibid.* p. 99.
- ⑩ Simmel, a. a. O. S. 41 f.
- ⑪ *ibid.* S. 43.
- ⑫ J. G. Brooks, *The Social Unrest*, 1903, p. 233 sq.
- ⑬ Ross, op. cit. p. 96.
- ⑭ *ibid.* p. 225.
- ⑮ Th. Veblen, *The Theory of Leisure Class*, 1922, p. 175.
- ⑯ Simmel, a. a. O. S. 59; Tönnies, a. a. O. S. 78.
- ⑰ F. Tönnies, *Soziologische Studien und Kritiken*, II. 1926, S. 26.
- ⑱ G. v. Mayr, *Statistik u. Gesellschaftslehre*, II. Bd. 1897, S. 121 ff.; P. Sorokin, *Social Mobility*, 1927, p. 383; A. Steinhart, *Untersuchungen zur Gebürtigkeit der deutschen Großstadt*, 1912, S. 35.
- ⑳ Steinhart, a. a. O. S. 60.
- ㉑ O. Rühle, *Kind und Umwelt*, 1920, S. 29.

- ② Tönnies, Die Sittē, S. 28.
 ③ R. Michels, Patriotismus, 1929, S. 101.
 ④ Th. Geiger, Die Gestalten der Gesellschaft, 1928, S. 70.
 ⑤ Michels, a. a. O., S. 102 f.
 ⑥ Ibid., S. 102.
 ⑦ G. Duhamel, Confession de Minuit, 1920, 17. éd. p. 234.

九

郷土乃至故郷の基底たる幼少年時代の生活の空間的及び時間的限定は、此の時代の交渉の對象従つて郷土乃至故郷の内容をなすものが、主として如何なる部類の存在者なるかを、直ちに示唆する。即ちそれは地域的封鎖に従つて、不斷に郷土の地域内に在つて、此處から出入することなき不動なるもの、人が此の地域の外に出る時、携へ行くこと能はざるもの、或ひは此の地域内に不斷に存在せずとも、少くとも常に一定の時期には反覆的に現はれるものでなければならぬ。斯くの如きものは精神的なるものよりも、むしろ物質的なるものであり、しかも地域の狹隘性の故に、日常感性的に接觸し得る對象物でなければならぬ。不動なる大地に結合して自らも不動なる交渉の對象としては、所謂不動産なる耕地建築物樹木の如きが考へられるのであるが、幼少年時代の感性的交渉の對象として最も主要なるものには、寧ろ自然の風物が擧げられるべきであらう。故郷と言へば直

ちに故郷の山川が聯想されるのは、右の如き故郷の内容規定よりして必然のことであり、故郷を歌つた詩歌が、その題材を多く故郷の野や山や谷や川にとることに就いては、改めて論ずる必要もないであらう。次に主要なるは、不動なる自然乃至感性的對象と結合し融合せる人間的なるものであつて、その第一は郷土を離れることなき人々である。此の事は人口に膾炙する *old folks at home* また故郷有母秋風涙の如きに於て、民衆的に表現されて居る。支那に於て古くは故郷なる言葉が故郷の婦女を意味したことも、此處に思ひ併せらる可きである。次に擧げらるべきは、此等の人々にのみ特有なる生活形式たる慣習習俗であるが、之と郷土乃至故郷との結合に就いては、既に都鄙の相異に聯關して縷述した。此の領域に於ては、言ふまでもなく衣食住の形式が、主要な位置を占める。特に食物に就いては、ミヘルスが廣汎な材料によつて、それが如何に思郷文學の題材となつてゐるかを明かにして居る。此等^①に附隨して郷土の傳説歴史も亦擧げらるべきである。

郷土乃至故郷の内容として、自然及び之と直接融合せる人間的なるものが最も主要なる位置を占めることは、郷土擁護の具體的對象として、斯るものが第一に擧げられることによつても明かである。郷土の擁護を目的として、今世紀初頭ドイツに創設され、法令その他にまでその活動の成果を現はした協會が、根本綱領として掲げたところは、「郷土をその自然的並びに歴史的に生成せる特殊性に於て擁護せん」とすることであり、また此の協會の設立者であり、今は諸國語に採用されて

居る郷土擁護 (Heimatschutz) なる言葉を作つた、郷土擁護運動の先達の指導者ルードルフの、此の運動の濫觴となつたと言はれる論文は「近代生活の自然に對する關係に就いて」と題するものである。^② ルードルフは此の論文に於て、自然と美はしくまた詩的に影響する限り自然の一片たる歴史的地念物との擁護を高唱するのであつて、歴史的生成物も郷土の内容としては、特にその感性的領域に於ける美的存在が重要視されて居るのである。而して此處に擁護の對象とされて居るものを個別的に見れば、丘陵叢林井泉小川橋梁老樹古建築物等の如き景觀の構成物から、特殊な動植物に及ぶのであつて、自然に對する純眞にして活潑な敬虔の情を覺醒せんことが、^③ 彼等の特に強調するところである。

郷土の自然物乃至感性的對象物にして、郷土の人間の傳承的營みと結合したものは、自ら郷土の内容の代表的なるもの郷土の表徴となり易い。而して封鎖的なる郷土の人間の營みに於て特異なる位置を占めるものは、出生及び死に關するものであらう。此の兩者は田舎に於ては、氏神の社從つて鎮守の森及び寺とその境内に不可分離的に結合して居る。しかも此等寺社の建築物や森は、郷土地域内に於ては、感性的に最も目立つものである。故に此等のものが故郷の構成要素として、重要な位置を占める場合が尠くない。歐洲に於ては、寺社に代るものとして教會がある。しかも教會の尖塔は、一見して直ちにそれと知られる程感性的に目立つものである。此の教會の尖塔が、幼少年

時代に於ける交渉の主要對象物となり、従つて故郷の主要内容として、懷郷思郷の對象となり易いは、極めて自然である。斯くてイタリー人が懷郷を呼んで教會の塔ごと (campanilismo) と呼ぶのは、^④故郷の内容として、郷土の慣行と結合せる感性的對象が、如何なる位置を占めるかを物語るものであらう。

第二に故郷の内容には、一般に極めて些末無意味なものが多い。此のことは、反覆なく偏局的抽象的なる交渉に於ては看過され易き微細なる特質が、多面的にして細部に及ぶ交渉の反覆の中に、漸次特殊なる意義と意味とを見出されることによつて、郷土の内容が成立し來る點よりして當然である。斯くて故郷の内容をなすものは、他郷から來た者には、全く些末平凡にして、何等の意義も見出し得ざるが如き、一木一草の微に及ぶのである。故郷を叙する人が、その叙述の對象とするものは、少年の頃夕暮に遊んだ裏通り、ランプにひそやかに照らされた卓、實の熟するのを年毎に待つた胡桃の木、庭の裏木戸、野を横切る狭い小徑、此の小徑に響く歌等であり、^⑤また夜毎に吠える犬、夜をこめて樂しみ聞いた夜鶯、忠實な僕の顔であり、^⑥更には月前に咲くもとあらの小菽、散るもみじ葉にうづもれた簷のしぶであり、家の前にせゝらく小川に生へる根芹、その陰にひそむ小魚、またその傍の小石であり、遠い彼方の山に初夏毎に現はれる殘雪の鳥の形であり、庭隅のおが屑に歳末の朝々に置く霜である。

第三に故郷の内容をなすものは、他郷の人にとつて無意義なるものが多いのみならず、往々にして彼等にとつては忌はしいものでさへある。元來忌はしいものも、之との交渉の反覆の結果は、かなり良きものと感せられ、更には愛好されるに至ること前述の如くであり、またそれとの交渉に於て自己の生が形成された對象は、その生とよく合致し何等忌はしからぬは當然であるけれども、そのとの交渉に馴れざる者、又は全く斯る交渉を経験せざりし者にとつては、之との交渉がその者の生の自由なる働きに對して、大なる否定となることは少くない。元來他郷の人に對する否定を與へるものたる郷土の内容は、全て此の外來者によつて嫌忌される理由あるものであるとも言ひ得られるのであるが、例へばロンドンの霧と煙の如きは、ロンドンに特有なる忌はしきものとして有名であると共に、此の霧や煙を、他郷にあつて懐しみ、之に對する愛着を表明して居るロンドン人は、ギボン、ラム等を初めとして頗る多いのを見出すのである。^⑦

第四に郷土の内容をなすものは、必ずしも價値に於て優れたものではない。此の事は郷土の内容は價値の觀點から選定されたものではなく、全く價値の見地を離れた條件、即ち出生の土地に共に存在したと云ふ價值的選擇以前の條件を、決定的條件として定まつたものであるが故に、極めて當然である。従つて郷土の内容をなすものを、それが郷土の内容なるが故に直ちに誇らんとするが如きは、價値についての盲目を告白するものである。併しながら、細部との交渉を全體に及ぼす時に、

然らざれば發見され難き、價値の優れた點も見出されること多きは事實であり、斯くの如き美點長所を發見して、之を尊重し保護し、之を知らざるものに知らしめ、その發達發展を計るは、そのものゝある所を郷土とする人ならでは爲し能はざる所であり、従つてこの人の、自己の郷土に對する責務であらう。徒らに他郷にのみある善美なるものをのみ口にするよりも、目前の郷土にあるものゝ貴ぶ可き點を享受し又育む態度こそ、現實に卽した正しい態度でなければならぬ。

斯くて第五に、郷土の内容をなすものを愛し好むは、只之の外に對象なき儘に、之との交渉を反覆し、之に馴れ親しむに到つたことに基つき、その價値の故に、之を愛し好むのではないが故に、郷土とそれの内容とを愛し好むことが、直ちに道德的義務に合することであると云へない。それはむしろ人間に通有なる傾向本性であつて、道德的義務よりする行爲ではない。これ即ち郷土愛は原本的事實であつて、沒價値的であり、決して倫理的範疇に屬することではないと云はれる所以である。^⑤

郷土愛は既に動物にさへ廣く見られる事柄である。昔に胡馬北風に依り越鳥南枝に巢ふのみならず、例へば動物を捕へて置いて、再び之を放てば必ず元の所に戻ると云はれるが、これも郷土を愛し慕ふ本能的現象と見るべきであらう。更らに黑人エスキモー人等を、その故郷から歐米の大都會に連れ來つて、あらゆる手段によつて彼等の生活を楽しくせんとしても、彼等は自己の單純なる故

郷を懐しみ、氣候よく、文明の粹を享受し得る歐米の都市を逃れて、一日も早く灼熱せる荒蕪の地荒涼たる氷雪の國に戻り得んことを希ふといふことは、屢々報告されるところであるが、これ又未開人が道義の念よりして歸郷を願ふのでもなく、自己の郷土が價値に於て優ることを認識せる故でもない。文明の果實が如何に便益に富むとも、それは全て此等未開人にとつては極度に未知なるものである。これに反して彼等の故郷にあるものは、全て熟知されたものである。彼等がその故郷を想ひ慕ふの餘り、形容枯槁するに至ると言ふのも、極めて當然のことではなければならぬ。これと同時に此のこと自身は、それが義務の意識から生ずるに非ずして、専ら自然必然的本能的に生ずる限りに於て、道德的に價値高いことでもなく、又反價値を有つたものでもないと言はれやう。

併しながら義務と言ひ價値と言ふも、實存するものによつて實現される可きことを要求するものなる限り、現實の存在との聯關を有するものでなければならぬ。而して現實の具體的存在は、何れも社會圈的相異を有し、従つて單に普遍的一般的なるものゝ如きは、抽象的形式主義の立場にとつてのみ、意義を有するに過ぎない。實質的 (material) 具體的なるものは、夫々の社會圈によつて限定され特殊化されなければならぬ。他郷のものがその儘郷土のものに結合適用される時は、郷土のものに否定を加へることが必然的である限りに於て、未開人の文明忌避更には文明の侮蔑は、自己の現實的存在に立脚する態度であり、具體的存在の地域的相異を省みず、普遍的價値を高唱す

る空疎な形式主義にまさるとも言はれやう。たゞ此の現實主義は、單に専ら現實に即するのみで、現實に即せる理想に向つての、現實を超えて進む發展の契機を缺いて居る。現在の存在構造その儘を至上とする者にとつては、之とその基底を同じくするが故に、之に最もよく合致適應する郷土の存在が又最高であり、郷土以外のものは、如何に多くの人にとつては價值あるものであつても、自己に合致適應する蓋然性少きが故に、之を拒否するも一應肯かれるのである。併しながら現在の存在、現存の生活をより良きものに發展せしめんとする者にとつては、現在の存在を構成せる現在の郷土の内容を、それが舊きが故に至上のものとして、他を外來のものなるが故に、また新たなものなるが故に、排斥する態度は許されないであらう。凡そ發展は現實存在を超えて進むものであると同時に、他く迄現實存在そのものに立脚してのみ可能なるものであつて、之を離れて考へられた發展は空疎にして現實化され得ざるものに過ぎない。故に現實的具體的發展は、それによつて超えられるところの、而してその進み行く基底となり、それに素材を呈供する現實存在そのものを、眞に正しく知ることを前提としてのみ可能である。茲に於て郷土の研究の必要が生ずるのであつて、近時は郷土科學の提唱をさへ見るに至つた。

郷土の存在は郷土人にとつては既に自明的に知られて居るものである。此の既に知られて居るもの、研究に當つて、特に注意すべきは、郷土の根本基底が空間及び時間に於ける封鎖的限定であり、

郷土の存在の自明性も亦、此の限定に基づいて居るといふことである。自明的に知られて居たものが、反省されその意義と價值とが意識的に把握されるのは、郷土の基底たる封鎖性の破れることと相關したであつたが、郷土研究も郷土内の存在のみを對象とするに止まる限り、眞にその存在を知ることが出來ず、眞の研究となることは出來ないのである。抑も研究は、その對象の屬せしめらるべき體系的聯關の全體に於て、それが占める位置を明かにすることによつて遂げられるのである。斷片的知識局部的探索は、未だ研究理論の前階に過ぎない。眞の研究は、對象を廣き場所に於て、他との聯關對比に於て明かにし、此の聯關に組織的統一を與へることに外ならない。故に郷土の研究は、狹隘なる郷土の限界を超えて、あらゆる他郷の存在との聯關を究める事を必要とするのである。郷土の存在は、郷土の人ならではの把握し難き微妙なるもの特異なるもの被覆されたるものを有つ。之の自明的了解を、明確なる反省に齎し組織立てることは、郷土の人ならではのなし得ざるところであり、これ正さに郷土研究の第一歩であるが、その爲めには郷土を超えた廣き世界にあるもの、郷土に無く郷土に缺如するものが何であるかを、併せ明かにすることを必要とするのである。他郷との聯關に留意せざれば、必然的に獨斷的誤謬偏局に陥り、豊富なる臚列も懸々たる絮説も、それ自身研究を毒する嘖語となり終るのである。郷土のものは單に自明的に知られ親しまれて居たのみならず、時としては、精細なる觀察の對象とされ、また長くそれについての記述を積まれ來つたもの

もあるのであるが、従前此等の觀察博識が、何れも夫々の郷土内に局限され、斯る一隅に割據して居た状態を脱して、比較綜合されることが少なかつた。郷土研究の資料事實は、既に多く以前から存在するのであつて、現在大切なることは分離孤立せる既存の資料知識を互ひに聯關せしめ、整理し體系づけることである。郷土研究がやがて郷土科學となり得んが爲めには、夫々の郷土研究家が、他の郷土の研究家と提携協力することから初めなければならない。

郷土存在の知識に基いて、郷土の内容への批判内容の發展への實踐的關與も初めて可能となる。即ち郷土が如何なる點に於て、また如何にして理想に向つて超えらるべきであるかも明かにされ得、郷土の内容についての保護促進と抑塞破壊が、現實に即して可能となる。抑塞破壊されたものを補ひ保護促進を完からしめる事は、郷土に缺如せるものゝ他郷からの導入に俟つところ少くない。此の導入も亦郷土内容の研究そのものに立脚し、何を採り何を防壓すべきか、更に採れるものを如何に郷土の内容に適用結合すべきかも、郷土存在の知識に基いてのみ、眞に妥當なる解答を見出し得るのである。他郷の存在を知らざるものは、郷土の存在をも知らず、従つて之を發展せしめる事も出来ない。他郷を知らず従つて郷土をも知らざるものが、その無知の基底をなす封鎖性の故に、郷土を愛し誇る念は極めて強く、他郷のものを蔑視し排斥せんとするは往々にして見られる現象である。斯る愛郷は、郷土の發展を阻止せんとする愛郷であり、自ら愛するものを傷ふ固陋な態度であると

云はなければならぬ。斯る態度の蒙を啓き、現實に即せる郷土の發展を計る爲めにも、先づ第一に郷土研究が必要であり、此の爲めにはまた郷土への即自的繫縛からの解放が必要である。

① Michels, a. a. O. S. 74 ff.

② E. Rudorff, Über das Verhältnis des modernen Lebens zur Natur, Wiederdruck des Aufsatzes aus dem Mittheilungsbuch der preussischen Jahrbücher, Heimatschutz, 1910, Heft 1, S. 7 ff.

③ ibid. S. 16.

④ Michels, a. a. O. S. 86.

⑤ L. Frank, Der Mensch ist gut, 1917, S. 43 f.

⑥ Michels, a. a. O. S. 84.

⑦ P. H. Boynton, London in English Literature, 1913, p. 154.

⑧ Michels, a. a. O. S. 55.

⑨ Westermarck, The Origin and Development of the Moral Ideas, 1912, vol. II, p. 168 sq.

一〇

故郷及び郷土に關する以上の論述に對し、矛盾し衝突するかに見える事實も尠くない。斯る反對的事實は、これ迄述べ來つたところと如何に結合調和さるべきであるか？ これ次に來る問題である。先づ曩に懷郷の情思郷の心は、何人にも自然必然的であると言つたけれ共、他郷に出ても何等不安憂愁悲寥を感ずることなく、従つて郷土を懷しむ情を感せず、反つて舒暢寛濶靜安を感ずる場合がある。此の事は如何にして可能であらうか？ 郷土がその嚴密なる封鎖性を失ふにつれて、郷

土の内にあつても、他郷のものゝ存在と之との交渉の仕方について知ることが増して来る。従つて他郷にあつて郷土になきものを、自ら試み味はんとする願望も増大する。斯る願望は他郷への憧憬を生せしめ、斯る願望の充足は喜びと満足とを與へることは云ふ迄もない。特に郷土が通常與へる所の、不安なく不足なき淨福の生活が、特殊な事情によつて與へられず、反つて陰鬱不快なる慘苦の生活を經驗せしめられた者は、他郷に於ける緊張不安憂愁憤激も、郷土に於ける苦痛陰慘に比して遙かに堪へ易きものとして、寧ろ他郷を愛するは自然の事である。無垢無憂なる幼少年時代を惠まれなかつた者には、成年の後も懷郷思郷の情が芽ぐまないと見なければならぬ。これ即ち、郷土感は幸福感であり、快樂によつて位置づけられて居る。若しも出生の場所に、魂を満す幸福の感じ、幼時の又幸福な若年時代の追憶の魅力と未來の諸々の希望とを繋ぐことが出来ぬならば、此の場所も何の意義があらう？と言はれる所以である。^①

他郷に於ける寛ぎと暢びやかさの特に大なる原因は、現實よりの離脱にあると思はれる。郷土に於て共に在る人々とは、行爲様式を等しくする意味に於て共同に存在するのみならず、同一様式の下に於ける事實的具體的行爲そのものをも、多く共同にする。これ郷土にあつてはその封鎖と狹隘の故に、行爲の主體が少數であり、しかも行爲の方法時期等が同一である上に、對象も亦限定されて、種類場所等を同一にするが故に、何事にも共同が可能になり蓋然的となるのである。斯くて喜

びも恐れも勞働も享樂も、郷土に共に在る人々は之を共に經驗し、此の共同は相互の熟知性を深める。しかも此の熟知性は單に互ひの出生以來の生活に互るのみならず、祖先以來の共同居住のある所では、祖先以來の歴史に及んで居る。故に郷土に於ては各人の一つの行爲も、その主體の生涯のみならず、祖先以來の歴史との聯關に於て了解される。故に郷土にあつては各自の行爲が微細なる點迄具體的に且つ全體的に了解されるのであるが、他方また右の生活の共同性の故に、各自の行爲は、他の全ての人々従つてまた郷土全體に影響し、郷土全體との聯關に於て意義づけられ、郷土全體と現實的關係を持つ。此處に於ては純粹に個人的なる行爲はなく、他の共にある人々の關與關心更には評判批判を伴はずしては、何事も爲す事が出來ぬ。然るに他郷に於ては、人は互ひに未知の關係にあるが故に、他人の生への關與配與は、只目前一時の一部分にかゝはり得るに過ぎない。相手の過去にも亦未來にも、更には彼の生の他の領域にも、關係づけることが不可能である。故に他郷に於ては、他人に對して自己の行爲を、それが生の全領域に對して有する聯關に於て、考慮する必要がある。現在の行爲は、過去の主張に對する矛盾將來に對する責任を顧慮する必要なく行はれ得る可能性が大きい。斯く行爲はその時間的制約を脱すると同時に、空間的制約をも脱して、他の人々への、特にそれ迄最も關係深かつた故郷の人々への影響に對する顧慮も必要でなくなる。行爲が時空的聯關から脱することは、即ち行爲の主體が時空的聯關から脱することに外ならない。彼の

生の大部分を構成するものは、郷土に於てあるものであるが、今や他郷に出ると共に、此のものとの事實的聯關の多くが斷たれることによつて、彼は此等のものから全く自由になる。彼は今迄郷土に於てあつた彼であると同時に又此の彼ではない。旅行者は通常、自己の滞在地に於ては名が知られない。またその名が人の耳に入つても、それに何等の聯想も結合されない。彼は「無名」(anonym)であるも同様である。② 異郷に於ける斯くの如き無名性は、その姓名を有つ個體の行爲が、その個體の存在の現時現處に限られた斷片的小部分との聯關に於てのみ、扱はれるに過ぎざることに基づくのであつて、全ての抽象が具體的現實性から遠ざかる如く、此處に於ても、人格の現實性が脱落し、人は一種自己の假象と化するのである。假象の世界が實踐的配慮から自由になる様に、異郷の人となつた者も、郷土に於けるあらゆる煩累配慮から解放されるが故に、自由が感せられ暢びやかさが感せられるのである。

けれ共先に他郷にあつて自然必然的なりとした、郷土の否定に基づく憂愁憤激哀傷孤寂感等の諸體驗の原因は、右の如き場合にも勿論存在する。然るにもかゝらず、他郷にある人の心の暢びやかさと靜安が害されない爲めには、此等他郷による郷土の否定を償つて餘りあるものが、此處に於て獲得されることが必要である。これを可能にする最も一般的にして確かなるものは、過去に於ては權勢近代に於ては貨幣であらう。貨幣は直接相手の具體的欲望を滿し愉悅を與へるものではない。

此の意味に於てそれは無性質無價值なる抽象物であるが、しかしそれはそれと交換されるあらゆる財貨享樂を獲得支配する力があり、これによつて如何なる具體的欲望をも満足得る潜在的な力を有するものである。あらゆる物的價值は、貨幣に還元される。時空の差異による制約を脱して、あらゆる物品を獲得し得、あらゆる人が之を希求する抽象的普遍性よりして、それは自然科学的概念に比せらるべきものである。此の限りに於てそれは普遍的な財貨であり、抽象的な享樂である。他郷にあつては、交渉の相手が未知なる故、その欲望を直接具體的に満足することは不可能である。只具體的欲望の如何を知ることなく、必ず之を満足得る手段即ち貨幣を提供することによつてのみ、嫌忌さるべき幾多の理由ある自己との交渉の不快を償つて、これを生起繼續せしめ得るのである。他郷に於て寛ぎ暢びやかさを感じ得る事は少くとも富を有する事を一つの須要條件とする。此の點よりして郷土の外に出て他郷の人となる者は、常に他郷に出るに要する資力のみならず、他郷人の未知なる異人たる自己との交渉に伴ふ不快を償つて餘りある代償を、權勢または財貨或ひは才能によつて提供し得る人でなければならぬ。

蘭陵の美酒鬱金の香を玉碗に盛り來つて、その琥珀の光を賞得る者にとつては、何れの處か是れ他郷なるをも知らないであらうが、これは通常人の能くし得ることではない、しかも權勢乃至富を有するとも、これは他郷に於ける郷土の否定を除去するに非ずして、多く他の方面からその否定

を償ふに過ぎない。郷土の否定の存する限り、それよりする懷郷思郷は絶滅し難いであらう。これ即ち美酒はあるとも能く客を酔はしめる主人の得難きを嘆ずることが多い所以である。權勢乃至富を有する人は、多く上層階級の人である。此等の人は郷土に無くして他郷にあるものを、郷土にある時に既に試用することも出来、斯くて郷土の中に他郷を齎らし、郷土に在つて他郷のものに接し、他郷のものと親しむことが出来る。此等の點よりして、郷土の封鎖性を破るものは、上層階級に多く、下層階級民衆は、郷土の土と結びつき、郷土の地域的限界の外に出ることをなさず、また郷土にあつて他郷のものに接し之に親しむの機會も少いが故に、全ての他郷のものは全く未知である。斯る貧にして他郷のものとの交渉を経験し之に親しむことなかりし者が、一度郷土の外に出れば、寛ぎ暢びやかさよりも、むしろ悲哀憂愁寂寥を強く感じ、懷郷の情に堪へざらしめられる可能性が大である。此の點よりして、郷土の基底を固持し、郷土の純粹性を持續するは、下層民乃至民衆であると言ふことが出来る。

貨幣は具體性個別性の未知なるものとの交渉を媒介する不可缺のものであつて、之によつて他郷との交通他郷への轉住も、一般に可能になるのである。上層階級が郷土にあつて他郷のものに親しみ、或ひは他郷に於ける滞在を樂しみ得るのも、根本に於ては、彼等が貨幣を使ふ自由を有することに基づくのであるが、上層階級の外に猶、貨幣を媒介として、他郷の人々と接觸交渉することを

専らにする一部の人間がある。これ即ち商人である。商人は諸地域の社會圈の間を往來して、有無相通することを業とするものである。彼は地域の封鎖性を破り、郷土の基底を傷ふことを職とするが如き存在者であるが、彼の活動は貨幣制度の發達によつて、初めて本來的な近代的特質を帯び得るのであつて、斯く見れば、貨幣は實に、上層階級と商人とを介して、郷土の封鎖性を破り、郷土に於てあるものを複雑化せしめて、漸次に郷土の基底を齟み來つたものであると云ふことが出来るのである。

他郷にあつて懷郷思郷の情の切實ならぬ場合があるが如く、又歸郷が反つて不快苦痛なる場合、或は寂寥哀傷を感せしめる場合、更には歸郷や同郷の者との會合が、ひたむきな喜びと寛ぎとを感せしめることなき場合も少くない。學童時代を共にした仲間が、その後分れて暮し、幾年かの後に故郷に相集つた場合、此等あらゆる方向に離散して居た者の間に、先づ最初に現はれるものは用心深い探り合である。再會のあらゆる喜びや昔の親しい調子を出さうと出来るだけつとめても、最善の意志にもかゝはらず、一種の冷かな不確さ、多くの場合にはまた他人に對する失望さへも感せられるのである。^①これ此處に相互の疎隔が生じたのであつて、長い間の行爲様式の異なる所に分れられに暮した人々が、夫々の土地の様式を收得し、此の様式が相互に未知なる故、昔の共通なる様式の殘存にもかゝはらず、此の未知の部分の故に或る程度迄相互が異人として感せられるは、避く可

からざる事である。

併しながら、只に最初の冷かさ疎隔よりする緊張に止らず、深い悲痛をさへ歸郷が感せしめるのは何によるのであるか？ 郷土にあつて他郷のものを求め之に親しむは、少數特殊者の能く爲し得る所に止まるが、之が求められ用ひられるのは、郷土にある一般的なるものよりも、此の他郷から求めたものが、有利なるに基づくことが多い。同一の事を爲すに、郷土人一般とは異なる有利なる手段により、一般に及ぶべき利を個人に多く收める如きことは、郷土の純粹なる所には現はれざる現象である。特定の傳承的行爲様式が、郷土の全成員に整一的に妥當して居るのが、純粹なる郷土の常態でなければならぬ。此の常態を破り、未知新奇なるものを齎らして動搖を生せしめるのみならず、新奇なるものを以て私利を計ることは、一般成員に好感を以て迎へらる可きことではない。然るに郷土を去つて他郷に出ることは、單に特定の新奇なるものによつて自利を計るに非ずして、他郷のあらゆる新奇なるもの、郷土になくしてより有利なるもの、利用を試す可能性を意味する。即ち郷土にある人々とは全く異なる條件によつて、自己一個の幸を求めることである。これとりもなをさず、他郷に出る事によつて、郷土の慣習を自分一個に於て破ることに外ならず、一種の郷土への背反反逆と云ふことが出来る。此の背反はその代償としての他郷に於ける成功の期待の故に敢へてされるのであつて、此の期待は出郷者のみならず、故郷の父老朋輩も亦出郷者に對して抱くので

ある。幸ひにして成功を得て歸郷せんか、單純なる田舎人は、其の成功を讚美羨望するに止まるであらうけれ共、不幸にして他郷に於ける冒險が失敗した時に、此の他郷にあつて荒き風波に揉まれ疲れ衰へた者に對して、故郷は必ずしも安らひ憩ひの場所を提供しない。郷土の生活にまされる生活求めて郷土を去り、郷土の人々とは異なる條件に於て、自己の幸と利を計りながら、斯くすることの當然の酬いとして期待された成功をから得ることなくして、空しく歸郷せる異端者に對しては、郷土の人々は、郷土に於て郷土的等質性を亂して個人的利益を計れるものに對すると同様に、一種の反感を抱き、白眼以て眺め侮蔑指彈を表にすることの可能性がある。しかも此の失敗は全て、それが歸郷せる者の生の全領域のみならず、祖先子孫のそのあらゆる細部に迄及んで有する聯關に於て、郷土の全ての人々によつて、把捉されるが故に、他郷に於てそれが只僅かに一小部分に於て觸れられるとは比ぶべくもない廣さ及び強さに於て感せしめられる。廣い世の中に幸を求めて郷土を出たものは、富貴錦衣の身となつた曉にこそ、歸郷の喜びを味ひ得るのであつて、他郷に栖遅零落し、成す無きに坐して晨昏多く倚門の親に負ける身は、歸郷の途に就いて遙かに郷關を望みつゝも、惆悵禁ずる能はざるものがある。彼にあつては、歸郷は他郷に在るとは異りながらも、これに劣ることなき苦痛に満ちたものでなければならぬのである。併しながら此處に於ても往々にして他郷の苦痛は、歸郷の苦痛にまさることが尠くない。富老は貧少に如かず美游は惡歸に如かずの

嘆ある所以である。

歸郷者に對して、故郷乃至郷土が、寛ぎ安らぎ憩ひの場所となるのは、郷土に於てのみ對象が多面的具體的個別的直觀的に既知であり、勞少くして效多き交渉が可能であることに基づく、斯くの如き交渉が歸郷者にとつて可能なるは、故郷が彼の出郷の時の儘不變なる場合のみである。若しも郷土に於てあるものが、歸郷者の他郷にありし間に變化し改められて、新たにして別異のものとなつて居る場合には、それはも早や此の歸郷者に對して郷土でも故郷でもない。ふるさとに歸り來る時、その主内容の一つたる山が有り難く感ぜられるのは、その山が幼少年時代に、全面的にして細部に亙る交渉把握の對象であり、他郷にあつても常に斯る把握の内容が直觀的に鮮明明確に思ひ浮べられた、その言葉に盡くし難き充溢を、その儘に何等損じ變ずることなく再び見出し得る場合である。斯る場合には歸り來つて現實に見る故郷の山は、複雑な構成要素を持つて居るにもかゝらず、その要素の一端をとり立てゝ叙するの必要もない。それは已に、自己にも他の共にある人々にも熟知のものである。またその要素の一端について問ひ質す必要もない。それは常に心に抱き眼前に思ひ浮べて居た儘であつて、何等不審奇異なる所もなく了解し盡くされて居る。斯くて其處には何等の努力も必要ではなく、何等の不安も疑ひも現はれ來る怖れがない。此の時には故郷の山は、あらゆる緊張警戒を解き去つて、安らかに暢びやかに平靜に、只黙して之に向ひ、充溢せる

觀照の中に、幸なりし幼年時代を憶ひ合せて居ればよいのである。

併しながら、これは故郷の山が變化しない場合に限られる。山について言はれたことは川についても人についても、故郷の全てのものについて言はれ得る。全てが激しく變化した故郷に在るものは、最早や黙して向へば足るが如き有り難きものではない。それは他郷と等しい緊張努力不安驚愕を惹起する場所である。其處に歸り行きさへすれば、あらゆる他郷に於ける荒く險しき生活の諸相から免れ得られる場所として、常に心を離れなかつた故郷が、今歸り來つて見れば全く二變して、長き他郷の年月の間胸底に往來して居た期待を裏切り、他郷に同じ未知不審のものに満ちて居るのを見出した時の、失望不安悲哀寂寥は如何ばかりであらうか？ 而して長き離郷は、故郷の變化と之による右の如き體驗の可能性を藏するものである。従つて斯る可能性のある場合、人は故郷に近づいて情更に怯へ、敢えて來る人に問はざるも自然である。特に他郷の生活が辛苦に満ち、その不斷の苦闘の間、日夜故郷を思ひ懷しんで居たものが、歸郷して故郷が故郷でなく、今や眞の故郷が全く喪はれて、復之を持つことの許されざるを知る時の、失望哀傷の深刻なるべきは言ふを俟たない。假令郷土に於てある全てが變化して居なくても、不斷にその像が自己の胸に抱かれ保たれて居たものゝ滅び又は様を變へて居る事は、歸郷者の心を傷ましめるに充分である。特に故郷を去つた時は、それが繁榮し、再び歸り來つてその荒廢を見るが如き事は、傷心殊更に甚しいであらう。

郷土乃至故郷に對する人の態度は、種々雜多なる因素によつて規定されて居るが故に、具體的事

實に就いては、諸種の因素を検査することが必要である。「故郷やよるもさわるも荊の花」と詠み、

「故郷に歸らんとして心進まず」と記した一茶は、今から百餘年前に此の世を去つて居る。即ち彼の時代は交通發達せず、郷土の封鎖性は極めて大であつた。しかも十四才にして初めて、郷土を出た彼は、郷土に於て略々人と成つたのであり、遂に「江戸しまぬ」者として、他郷に在るものと不調和な生活を持続せざるを得なかつた上に、常に極度の貧困にさいなまれて居た。斯る事情にもかゝはらず、猶歸省して焦立たしき憤滿を表はすは、郷土に於ける彼の幼少年時代の生活が、「杖の憂目を受くること日に百度月に千度一年三百五十九日目の腫れざることもなかりける」程であつて、故郷とは彼にとつては痛苦憤激を経験せる所であり、また歸省は斯る憤激痛苦を味はしめた人々と再びこれを重ねることであつたが故である。併しながら、斯る憤激痛苦は、只故郷に於ける特定の間人に起因するものであつて、故郷の主要構成要素たる自然は、他の人の故郷のそれと何等異なることはなかつた。故に故郷の自然を懷しむの情は、彼に於ても極めて強く、心身の力の衰へを感ずると共に、歸住の情止みがたく、遂に故郷を晩年の住所とした。「げげのげげげげのげこくの涼しさよ」と言ふは、故郷の外には見出し難き涼しさの有り難さをたゞへ、故郷の自然に對しての満ち足りたる心情を現はすと共に、斯る涼しさを知らざるが故に、此の國を下下の下下となす江戸その他の人々

に對して、ひそかなる誇りを感じるを物語つて居るのであつて、斯く見來れば此の詩人のその故郷に對する態度は、これ迄故郷に就いて述べ來つたことと、みな合致すると云ひ得られるであらう。

- ① Michels, a. a. O. S. 85.
- ② Tonnes, Studien, II. S. 17.
- ③ Tonnes, Gemeinschaft und Gesellschaft, 4. u. 5. Aufl. 1922, S. 45.
- ④ Ibid. S. 48, 113.
- ⑤ Th. Geiger, a. a. O. S. 71.

— —

郷土乃至故郷の基底構造内容の問題から轉じて、最後に郷土乃至故郷の變化生成の問題に赴かなければならない。即ち郷土乃至故郷を、時の經過に於て眺めなければならぬ。郷土乃至故郷の根本基底たる空間的封鎖性は、主體たる人間の定住と、客體たる交渉の對象の固定性とに分つて考察することが出来るであらうが、先づ前者に就いて、その歴史的變化を見るに、幼少年時代の生活それ自身も、未だ直ちに郷土乃至故郷の基底ではなく、之が一定の土地に於て過される場合にのみ、眞の基底となり得るのである。而して此の時代が一定の土地に於て過されることは、出生以來主體が移動せざりしことの蓋然的なるを示す。従つて郷土乃至故郷は、出生の場所が幼少年時代の場所と一致するところに、最も多く成立の蓋然性を有つ。逆にまた凡そ郷土乃至故郷は、「己れの生れ

し地」に非る所に成立する可能性極めて少く、幼少年時代を出生の場所に過ぎざる主體は、自己の郷土乃至故郷を有ち得る可能性が、極めて乏しいのである。自我の確立以前、自我の特殊なる行爲の形式と内容との確定以前に、出生の地を離れて轉々する者は、諸處の様式と内容とを集めて自我を形成し易い意味に於て、此等諸處が部分的郷土であるとも言ひ得やうが、嚴密に言へば、此等の何處も眞の郷土ではないのである。斯く見來れば、郷土乃至故郷を出生の地なりとする一般の説明は、實質的の正しさを有つことが知られる。併し單に出生の地と言ふのみでは不充分であつて、出生した所から移動せざる場合にのみ郷土が成立し、幼少年時代を越えて後、其處から他郷に出る時に、故郷が成立するのである。然るに單に出生の地とのみ定義して、何人も疑はなかつたのは、出生と幼少年時代とが、同一の場所に於て過ぎれるのが一般的であつたからであらう。更にまた支那に於ては、故郷を父母之邦とするのも、幼少年時代は父母と共に過され、父母の住居否祖先以來の住居が、一定不變なるが故に、幼少年時代の生空間も、祖先以來の地域内に固定して居ることに基づくのであらう。同様にして英語の home に單に住所なる解釋が與へられるのも、住所が不動不變なるものなることを前提して居るとすれば、此の解釋も出生の地なる一般の解釋と何等實質的に相異するところはないのである。併しながら出生の所と幼少年時代の所との一致、またその根柢をなす人間の定住も、歴史的變動を超越せるものではない。農耕による人間の土地への繫縛以來、交通手段

の幼稚その他の事情により、封鎖的自給自足の經濟が、長く持續されて近代に及んだのであるが、近代に先立つ時代は、一般に封建制の時代と呼ばれて居る。封建制が人間と土地即ち封土との結合を基礎とすることに就いては、改めて論ずる必要もないが、此の制度はその成立を、土地及び之に結合された人と物とを、武力を以て守ることに負ふて居るのであつて、此の守られる可き土地が、地域的に分たれ、斯く區別された夫々の地域を占有する社會團體が、武力を以て擁護され、又武力を以てする地域の擴張が計られつゝ、相互に對立し、常住の潜在的乃至顯在的對抗關係をなして居たが故に、此の制度の主要構成要素として、武士乃至騎士が支配的位置を占めて居たのである。凡そ團體間に抗争の關係ある時には、各團體は所屬成員が他の團體に去ることによつて、自己の勢力の減退するを警め、また他の團體の所屬員が入り來つて、不利害惡を醸すを防がんが爲めに、自らの出入を拘束する。また對立抗争の間柄にある他の團體からの經濟的援助を期待することの不可能よりして、各團體は經濟的自律自給自足を原則とする。フランス初期封建時代には、城が殆ど全ての必需品を作つたことによつても窺はれる如く、各領地は夫々單獨の經濟單位を形成し、従つて各地は夫々特有の物産を生ずるに至り、之を誇りとした之によつて繁榮をも獲ち得て來たのであつた。しかのみならず不斷に外部よりの脅威に備へる爲めには、常に團體の成員間に聯絡統一の可能性を確立して居なければならぬ。此の可能性は、各成員の住所の明確に一定して居ることを前

提とする。^②此等の事情よりして、封建時代に於ける人間の地域的移動は、極度に制限され、従つて各人の出生の地は幼少年時代の地であり、否壯年老年より死に至る迄、同一の地域内に生活を續けるのが、あらゆる人の運命であつた。

分立封鎖の封建制の崩壊の主因の一つとして、武器従つて戦術の改新が擧げられるが、此の改新は科學の發達に基づくものであり、科學の發達は武器のみならず、自然支配の各方面に現はれたのであつて、特に交通の發展と工業の進歩は、その大なる成果であり、更に此の兩者の進展は、商業の勃興と互ひに因果の關係をなす。此等の變革に基づき、嘗ては封建的支配の政治的勢力を中心として成立した都市が、商工業都市として急激なる發展を遂げ、封建的拘束の滅弱に従ひ、人間及び物貨の集散が大量的に行はれるに至つて、長き人間の定住が漸次破壊されるに至つたのである。斯く人間の地域的移動が社會組織及び近代文明と密接に聯關を有することは、移動の統計的調査が明確に物語つて居る。即ち統計によれば、移動は支那印度の如きに於ては極めて少く、近代の歐米に於て極めて著しいのを見るのである。^③文明の進歩と共に農耕によつて定住に轉じた人類は、更に文明の進歩によつて商工業の發展に伴ひ移動的になつたのである。

近代に於ける地域的移動は、十八世紀の末から不斷に増大し來り、現在も猶益々増大し行きつゝあると言はれる。^④此の移動の増大は單に移動する人の數の増加のみならず、同一人の移動回數の増

加を意味し、此のことは幼少年時代にある者にも當て倣まるのである。ドイツの一小都に於ける調査によれば、一學級四五名の兒童の、四學年間に於ける住所の變更は、一名は一度、二名は二度、九名は三度、また九名は四度、六、七、八度より一二度迄各一人宛であつた。また上級では七年の通學の間に轉住せざるものは六乃至一〇名に過ぎなかつた。ミュンヘンに於ける統計によれば、小學校入學以來轉居一度のもの二〇・八%、二度のもの一〇・七%、三度のもの八・五%、それ以上のもの一〇・八%である。^⑤斯くの如き事態に於ては、我が愛する出生の地 (my beloved birthplace) たる我が郷土等の言葉は、益々弱まり行くであらう。年毎に移轉を重ねて行く者が、終生その出生の地に止る者に於ては不可避的なる、自己の出生の地への深き愛着と愛郷心を有つ能はざるも當然である。^⑥斯くて近代の候鳥生活 (Zugvogelium) 又は近代の遊牧生活 (Nomadentum) が叫ばれ、また斯る移動の激しさは、若年者の小さき胸と頭に郷土的感情及び郷土意識の何等の痕跡をも生ぜしめざることが種々論議されるに至つた。更にまた移動回數の増加と平行して、移動距離の著しい伸長従つて移動地域の擴大が認められる。過去に於ては移動は出生地の周圍の、比較的狹隘な區域に限られて居た。現代歐米社會に於ては全くこれと異なるのである。^⑦此のことは外來者の郷土の者に對する質的差異の増大を、またやがて廣き地域に互る同質化の進行を指示するものである。

猶此處に注意すべきは、斯くの如くに激しい移動は、工場労働者に於て特に著しいといふことで

ある。その結果同一工場の労働者は、益々広い地域から集められ、その出生地は益々差異が甚しくなるとともに、各人の轉住の頻度が益々高まることは、各國の統計が如實に物語つて居るところである。⑧人間が貧困になり經濟關係が發展するに應じて、移轉は益々頻繁になり、郷土の喪失は愈々強度になる。多數の貧民を作り、これをして移動せざるべからざらしめ、斯くて彼等をして郷土を持つことを不可能ならしめるものは、右の交通商工業都市等の發展膨脹であるが、人は更に此等の外に、否此等と不可分離的に結合し、此等全ての根柢にある動因とも見られるものを擧げる。それは即ち資本主義であつて、之こそ民衆に彼等が愛し初めたばかりの土地を逃れまた避けるべく、常に繰返して強要するものであり、また兒童を既に失郷の進み行く流れに投じ、その中に於て彼等を無慈悲にも暗き運命に委ねるものであるとされる。⑨前述の如くセイが労働者の轉住嫌忌に惱んだのは、近代的生活形態の發生が、之に先立つ封建的なものゝ殘存によつて、資本主義發展の初期に妨害された爲めに外ならない。此の悩みはその後の資本主義の發展によつて急速に解消され、逆に労働者はバンと仕事を求めて、果てしなく轉住を續けて行かなければならなくなつた。

斯く人間の彷徨を引起した資本主義は、他方また交渉の對象の側から、その普及移動交替を激甚ならしめることによつて、郷土の基礎を破壊するものである。先づ資本主義的生産は必ず大量生産であり、生産の大量的なることは、狭き特定地方にのみ頒布消費が限定されることゝは相容れな

い。此の大量生産は、地方的生活興味の一様化統一を企畫し、交通の發達と結合して、同一物品を廣い地域に一様に頒布することによつて、發展し得るのであるが、斯る發展が夫々の地域にあるもの、特異性の減少を必然的ならしめることは言ふまでもない。しかのみならず、中世的生産方法を以てしては、地方的特殊條件によつて、不可抗的に制約されて居た諸々の特産物をも、技術の發達はその特殊條件を克服して中央に集中し、地方的特殊生産は自滅するか、または少くとも獨占的特殊的地位を失つて、特産としての名のみ殘存しつゝも、實は各地に於て生産され普及されるに至る。次にまた資本主義は交渉の對象を頻繁に變化交替せしめることによつて、常に新たな對象を一般に供給せんことを計る。此の事情の端的なる表現は即ち流行であるが、流行は現代に於ては、決して單に衣服の領域にのみ局限されず、あらゆる領域にその支配を及ぼしつゝあることは、また多言を要せざるところである。資本主義による生産費の低減、社會的富の増大による浪費可能の増進等によつて、流行は益々その變化を速め、生産及び分配の技術に於ける一々の進歩と共に、新奇なるものに對する狂的な索求は、益々その荒々しさを加へて行く。他方また流行の限界も益々廣まる。ルネッサンス時代には、流行は單一の都市又は階級に限定されて居たが、現今では、何等の地域的または階級的限界もない。一時には只一つの流行があるのみである。^⑩

以上の如くにして中世を閉ぢて近代を發展せしめた諸因素は、郷土の基礎を破壊し、遂には郷土

乃至故郷を衰滅せしめんとする傾向を示すに至つた。古き時代の人々は、殆ど皆郷土を持つて居り、此の郷土は即ち己の生れた地であつたが、近代人特に近代大都市人は、出生の地はありながら、郷土従つて故郷を有たない。郷土の斯くの如き衰頹を直接表示する現象は頗る多く、例へば前世紀の後半から郷土の擁護が叫ばれるが如きも、此の頃から特に顯著切實になつた郷土の衰頹によつて、郷土に對する反省意識が自覺され、郷土をその衰滅から救ひ、近代的發展と郷土の存續とを結合調和せんとする苦心の表現に外ならない。

また人間の郷土的規定の減弱は、外來者の扱ひの變化に於て極めて明瞭である。原始社會に於ける外來者の待遇に就いては既に觸れたが、最近に於ける郷土の衰頹以前、即ち各人が夫々郷土をもち得た時代には、各人の行爲の様式及び内容は、夫々の郷土に於て形成され確定して居た。従つて人は自己の特質を全て郷土的に決定され、しかも特定郷土に育つた人々は、地域的封鎖性の故に個性の發達乏しく、皆一樣同一の特質を共有して居た。故に外來者の郷土を知れば、その人が如何なる特質を有するかは、略々知ることが可能であつた。勿論此の場合に知られるのは、抽象的にして偏局性を持つ類型性に於てであることは、不可避的であるが、郷土的類型から個人的偏差逸脱の僅少なりし此の時代に於ては、此の郷土的類型が外來者との交渉の第一次的足場とされるのが常であつた。此の事を示すものとしては、人が他郷に入る時には、一般に出生證書 (Geburtschein) 又は出

生地を明記せる旅券を携へて、之を示す慣行が擧げられる。然るに出生地と郷土従つて故郷とが分離し、更には社會集團の地域的開放に並行する各人の個性の發達は、同一地方に生れまた育つたもの、間にも、行爲様式の差異を増大せしめ、一部の者の具體的行爲を基礎として構成された類型が、他の者の特質に對應合致せざること甚しくなり、他方また斯る偏局性なき類型は餘りに抽象的に過ぎる有様になつた。斯くて現今に於ては、出生證書または旅券によつて、人の出生地からその人の精神的または道德的特質その他を判断せんとしても、兩者の間に必然的又一義的な聯關が存在しないが故に、正しい判断を下すことは不可能であり、強いて下せば、その人の眞の個性特質を見誤り、相互の交渉に錯誤煩累を増すに過ぎない有様となつた。即ち出生證書提示の慣行は、之を成立せしめた根據を失ひ、その實質的意義を喪失するに至つた。今や出生證書の如きを携帶提示することは、事宜に反する又時には不當な結果を醸す煩はしき過去の遺風と感ずる者多きに至つた。^⑩此のことは正さに出生地と郷土との分離、更には郷土そのもの、衰頹、従つて常に都會人のみならず一般に近代人が、郷土乃至故郷を有たざるに至つたことを物語るものでなければならぬ。

斯くの如き郷土の衰頹は當然法令の上にも現はれて來る。その著しい例は、移轉自由乃至移住權 (Freizügigkeit) の原則の確認であつて、全民衆生活を捉へた放浪性は、特に移住自由權が現行法となつた後には、貧民法 (Armenrecht) が最早や郷土乃至故郷の概念を認めて居ないといふ事實に反

映して居る。ドイツ立法はプロシアの先例にならつて、而してまた正當な理由から、故郷に代へるに救済居住地なる概念を以てした。而して救済居住地の獲得に、而してまたその喪失に必要とされる時間が短いので、個人は自治體への所屬の感情を成立せしめず、自治體も個人に作用を及ぼし得ない。斯く短時間に諸方を轉々する個人が最早や何等郷土を持たぬと言はれるのも、極めて當然である。⁽¹⁹⁾

以上によつて明かなる如く、近代人は今や郷土を有たざる人間、郷土を知らざる人間となりつゝある。而して此の郷土無き人間と郷土有る人間との差は、同時に又人間の存在そのもの又斯る人間の於てあり構成する社會そのものに、根本的なる差異を現はして來る。エスキモー人は、夏季には冬季に於けるとは全く異つた社會組織を示す。即ち夏季には個々の家族に分れて遊牧し、冬季には大なる定住的民族乃至集團をなして生活する。斯くの如き相異に従つて、彼等には「夏季道德」と「冬季道德」とが發達し、夏季には徹底的な個人主義が支配し、冬季には之に反して、完全な共產主義が支配する。⁽²⁰⁾未開人社會が一年の間に示す此の變化對立が、郷土の基底の變化に従つて近代社會にもまた現はれ、郷土の絶滅は、人間そのもの同時に社會形態の變革改變を現出するのである。然らば郷土的生活と無郷者の生活との差は如何なる點に存するのであるか？

郷土的生活は既に反覆せる如く交渉の對象に就いて、多面的にして微細なる了解把握を有ち、對

象を其の個性に於て扱ふ生活である。而して此の對象を志向する表象觀念は、限りなく複雑なる構成要素を持ちつゝも、明確なる直觀性を有すると共に、之に對應する感情情緒も亦、言ひ表はし難き複合性に於て生氣と新鮮性を示すものである。斯く郷土に於ては人は交渉の對象をその全き存在に於て、具體的個別性に於て扱ふのであるが、他面又彼自身も郷土に共に生活する他の人々から、同様に多面的具體的直觀的に扱はれるが故に、此の扱ひに對しては自我の全存在を擧げて應答し、夫々の行爲に分たれざる自我全き自我を關係づけるものである。換言すれば郷土に於ける生活は、具體的全體として人間が、具體的全體としての人及びものに對して持つ交渉に於て成立つものである。然るに無郷者は有郷者の特質たる全體性具體性直觀性を最初から持たない。人が人たる限り、又は夫々の物が夫々の物たる限り、それが生れ作られた地域的社會圈の特殊性にかゝはりなく、普遍的に共有する存在、即ち何人にも自己の出生成育の地域的差異にかゝはりなく把握了解し得る存在をのみ、交渉の對象とすると共に、自己自らも自我の存在の斯る抽象的普遍的部分をのみ、相互の交渉の中に入れるに過ぎないのである。抽象的普遍者が抽象的普遍者と交渉を有つに過ぎざる無郷者の相互作用の中には、具體的直觀的なる觀念に最もよく伴ふ可き感情情緒の新鮮性生動性は缺如し、此處に支配的となるは、抽象的普遍的要素の扱ひを本領とするところの、合理的思惟である。斯くの如き非情的機械的合理的人間が即ち無郷人であり、元來郷土そのものを知らざる無郷者は、

最初から具體的全體者としての生活を知らず、従つて斯る生活の他郷に於ける否定に基づく、異郷の人としての體驗を知らず、故郷と他郷との別も知らない。常に全ての存在の一部一面のみが了解把握の對象となり、全き人間具體的なる物は、何等對象とされることが無いと共に、彼自らの全人格も亦、部分的に分たれることなく働き出でることはないのである。

郷土の特質たる生活的全體性具體性個性主情性は併しながら、他面に於ける生活の特殊性無自覺性を代償として購はれたものである。郷土に於てあるものに就いての反省自覺は、郷土を出て他郷の人となる時に、最も鋭く明確になり、郷土の研究は他郷に於てあるものとの聯關に於てのみ可能であるが、他郷の人となること、他郷に於てあるものとの聯關を明かにすることは、郷土の基底たる地域的空間の固定封鎖を破ることによつてのみ可能である。郷土の直接の基底は幼少年時代の生活の地域的限定であるが、此の限定の根柢には單に幼少年時代にある者のみならず、郷土社會そのものゝ封鎖性が存在することは既に述べた如くである。郷土がその基底をそこなはれることなく保持した時代には、郷土に生を享け此處に育まれた者は、幼少年時代を越えて後も、郷土の地域空間の外に出て、其處にあるものに就いて知る機會はなかつた。彼が知るは只彼の郷土の慣習習慣のみであり、而して先に述べた如く此の慣習習俗の外の様式を知らぬ郷土の人々は、凡て此の様式に専ら従ふが故に、特定の様式が一樣に全員を支配し、此の様式に背き之と異なる様式に於て行爲せ

んとする特異なるものの現はれない事は、即ち郷土が大なる實在性を有する所には、郷土の人々の個性が發達せざる事を意味する。他郷のものが新たなるものとして入り込むことなき郷土は、他郷と有無相通することなき故に、何れも普遍的一般的なるものに乏しく、夫々歴史的地理的限定に基づく特殊性に富み、又之に繫縛されて居るのである。

此の特殊存在への即自的繫縛から解放されて、郷土の反省が起り來つた反面に、郷土の基底そのものが破壊され郷土擁護が叫ばれて居る。云ふ迄もなく郷土の喪失破壊は、只夫々の郷土のみから起ることではなく、郷土の於てある廣き社會全體の動きに規定され應じ來つた現象に外ならない。斯る社會全體の動きは然らば、如何なる方向を執つて居るのであるか？ 社會の運動を表はす方式も種々あるが、社會學的に重要にして現在最も廣く認容されて居るものは、「共同社會より利益社會へ」なる方式であらう。而して此處にこれ迄論じ來つた郷土社會の特質、即ち空間的封鎖性固定性と狹隘性、相互作用の多面性具體性直觀性個別性と主情性、傳承の支配と成員の即自的態度、特殊性への繫縛と個性の抑壓等は、全て共同社會の根本特質をなすものなること、又無郷者の構成する社會の特質即ち、地域的開放性、相互作用の一面性抽象性普遍性非情性、合理主義や流行の支配、成員の對自的態度と個性の伸長等は、全て利益社會の根本特質をなすものなることに就いては、改めて論ずる必要もない。郷土は實に共同社會の最も代表的なるもの、一つである。故に共同社會型に

屬する社會の榮えたところ、即ち古代田舎に於て、郷土も亦その基底を傷はれることなく實在した。共同社會的意志の主體としてテンニースが擧げた兒童女子民衆は、何れも郷土的基底に最も強く制約規定されて居る主體なることは、先に述べたことによつて、充分明かである。併しながら今や幼少年時代も交通の發達によつて、徒歩によつて往復し得る地域以外に迄生空間を擴げられ、又身邊に在るものゝ交替複雑化が激増せることによつて、更には父母の轉住に伴ふ地域的移動によつて、郷土の而して同時に共同社會の基底を喪ひつゝある。女性が、更に民衆特に勞働者も亦、同様の變化を經つゝあることに就いても既に夫々關説した。

右の如く共同社會的意志の最も純粹なるもの、最も多く郷土的規定の下に立つものが、何れも滔々として、その規定から脱しその純粹性を失ひつゝある。郷土の喪失は共同社會的なるものゝ崩壊と共に、今や不可避的なるものゝ如くに見える。發達せる交通機關の一切が撤去され、廣い生活領域の展望、個性の自由の要求が被棄されぬ限り、郷土を昔の純粹性に戻すことは不可能である。利益社會的なる近代社會生活の抽象性、形式性非情性に對する不満忿懣は、喪はれ行く共同社會的なるものゝ主要形態としての郷土に對し、痛切なる愛惜の叫びを發せしめて居る。併しながら郷土の持つ特殊性への繫縛、無反省的なる靜安、個性伸長の缺如の如きは、希求さるべきものではなくして、克服さるべきものであらう。徒らに過ぎ行くものを追ひ、現在を呪咀するは、寧ろ甘き感傷に屬する。

郷土に對して現在執らるべき態度は、郷土生活の具體性直觀性主情性を保ちつゝ、之を近代的普遍性合理性と結合するの道を構はるることにあるであらう。郷土に歸れとは今日屢々耳にするところであるが、斯る叫びの聞かれること自身が、郷土そのものゝ衰頽を表示する。嘗ては自明的なりし郷土の存在と其處にのみ可能なる全體的具體的生命的活動が失はれ來つた時、その意義が初めて顯著になり切實に感せられるに至つて、此の叫びが發せられるに至つたのである。それは疑もなく近代利益社會的生活形態によつて、極度に抑壓され虚げられた生命の全體性具體性が、再び自己を取戻し、自己を主張せんとするところから發せられる叫びである。併しながら古き共同社會の基礎たる封鎖性狹隘性は、之を再び新にすべきよすがもない。封鎖性の破壊社會的地域の開放擴大を保持しつゝ、しかも一度失はれた生の全體性具體性を如何にして取戻すべきか？ 郷土の有つ特殊との相即即自態を脱しつゝ、郷土の有する全體性具體性を、如何にして郷土の基底の破壊によつてのみ可能なる普遍性と結合するべきか、此處に現代に於ける郷土の問題の最も重要な難點が存在する。而して此の問題は共同社會と利益社會との止揚綜合の問題に外ならない。之は常に郷土乃至故郷の問題に止まらず、現代社會團體の全てに共通な問題であり、此處に現在及び今後の幾世紀かの社會發展が實踐的に解決すべく課せられた最も重大且つ困難な課題が存在するのである。

- ② *ibid.*, p. 576.
 ③ Sorokin, *op. cit.*, p. 382 sq.
 ④ *ibid.*, p. 381.
 ⑤ Rühle, *n. a. O.*, S. 28 ff.
 ⑥ Sorokin, *op. cit.*, 389, 523.
 ⑦ *ibid.*, p. 382, 388.
 ⑧ *ibid.*, p. 386 sq.
 ⑨ Rühle, *n. a. O.*, S. 30.
 ⑩ Ross, *op. cit.*, p. 104, 106.
 ⑪ Michels, *n. a. O.*, S. 86.
 ⑫ Tümmes, *Studien*, S. 33.
 ⑬ C. Welf, *Pädagogische Soziologie*, 1929, S. 88.

一一一

元來郷土の内容が何であり如何なる意義を有するかに就いての意識反省は、他郷による郷土の否定に於て成立する故郷を介するを常とするのであるが、此の時故郷の従つてまた郷土の内容とされるものは、それとの交渉が他郷に於て否定されるところの、故郷に在つて他郷には缺如するものである。即ちそれは郷土に在る全てのものではなくして、その中の只他郷に缺如するものゝみである。故に郷土に在つて同時に他郷にも在るものは、故郷の従つてまた郷土の一次的内容とはされ難

い。斯くて故郷従つて郷土の一次的内容は、郷土に否定を加へる他郷に、何が在り何が無いかによつて定まるのであつて、郷土の故郷への轉化を媒介する他郷が、何れの他郷なるかに聯關して、常に相對的に定まるものである。従つて斯くの如き相對的内容の於てある地域としての故郷乃至郷土の地域も亦、極めて相對的に定められるに過ぎない。しかのみならず、郷土の地域内の存在と雖も、その全てが此の地域内に生活する全ての人間的存在者によつて、一樣に交渉の對象とされるのではない。故に他郷に於ける郷土の否定従つてまた郷土の内容と地域的範圍も、他郷の人となる主體の相異に従つて相異し、一義的には確定し難いと言はなければならない。母の懷と腕が、子供の最初の郷土であつて、その中にある時、幼きものは安全に感じ、自己の平安が何處かで妨げられた時には、その中に逃れるのであり、母に次いでは家族が郷土であるとも言はれるが、更に原始時代には、郷土は竈の邊であつたとも見られる。Heimat は Heim のある所 (ort) である、Heim は元來 Herd (竈) を意味した。竈の場所が後に家にまで擴大されて、父長制の時代に郷土を「父家」とする解釋が生じ、これが今に傳へられて居るのであると考へられる。此等は何れも、郷土乃至故郷の地域が、年齢により時代によつて、一定せざることを示唆するものである。

勿論幼年時代の交渉の對象となる個物の在る地域を、此の時代の生空間と呼ぶならば、此の生空間の地域は、略々之を確定することが出来るであらうが、此等のものゝ配與する存在の類型が妥

當し支配する地域は、多くの場合に於て右の生空間を越えるより廣い範圍に互るであらう。而して斯る類型は、存在の領域の異なるに従つて無數に存在し、その各々の妥當支配する範圍は夫々相異して、或るものは極度に廣い支配範圍を有し、他のものは頗る狭い範圍に妥當するに止まるであらう。他方また類型の支配妥當とは、個別的存在者が自己の存在に於て、類型的普遍者に配與し、之を個別的に具體化することを意味するのであるが、此の配與具體化も亦、極めて相對的であつて、類型からの偏差の仕方及び度の種々異なるに應じて、配與も極めて顯著なる場合から、殆んど認められ難い場合まで、あらゆる差異の段階があり得るのである。故に個物の類型への配與従つて類型の支配の地域的限界も、明確に劃すること不可能であつて、只此の配與の仕方及び度の差異に従つて、種々之を劃することが出来るのみである。通常他郷にも、幼少年時代の生空間に支配せる類型が絶無ではなく、只その數が少くその支配の度が低いに過ぎない。此の數の多少及び度の高低に従つて、一定地域の他郷性乃至郷土性の度も定まるのである。故に嚴密に言へば特定の地域は、郷土であるかないかよりも、如何なる度に於て郷土であるか又はないかが問はるべきである。此の郷土性の度の最も高いのが、幼少年時代の生空間であり、その中心に父家が位し、更には母が在るのであらう。而して此の中心から遠ざかるに従つて、郷土性は、漸次その度を減じ、他郷性が次第にその度を高めて行くであらう。但し郷土の中心からの距離と郷土性及び他郷性の度との關係は、地理的條

件や行政的經濟的その他の事情によつて、種々制約されて居ることは言ふまでもない。

今幼年時代の生空間を出て、之に隣接せる地域に入る時は、兩地域を同様に支配する様式類型も多いであらうが、支配の度を減ずる様式類型も亦あるであらう。換言すれば、前者に支配する類型への配與の度及び仕方によつて、前者に在る個物と異なる意味によつて、前者と共通ならざる個物が後者には見出されるであらう。此の隣接地は此等類型及び個物の相異によつて、他郷となるのであるが、此の第一の他郷から、より遠隔なる第二の他郷に出れば、故郷及び第一の他郷に同様に支配し、第二の他郷に於てはその支配の度を減ずる類型や、またその支配の認められ難いものも少くないであらう。然る時は斯る類型に配與し、第一の他郷にあつては、未だ故郷の一次的内容とされなかつたものも、第二の他郷に對しては故郷の内容となると共に、そのものゝ於てある場所としての第一の他郷も亦、故郷の性格を獲得するであらう。斯くして第二の他郷に對しては、故郷は本來の故郷と第一の他郷とを併せ包含する廣い地域にまで擴大されることになる。斯る故郷の地域の擴大は、更に第三第四の、より遠隔なる地域にまで、及ぼされ得ることは明かである。

故郷の中心から遠ざかることによる故郷の地域の擴大に相關的なる此の擴大された地域の全般に支配する類型の數及びその支配の度の減少は、此の擴大された故郷の内容をなすものに就いての把握了解が、その多面性具體性直觀性また熟知愛好の度を低下せしめることを必然的に伴ふ。たゞ此

等のものと同く、此の地域の外なるより遠隔なる他郷には無く、此の他郷に於て出遭ふものに於けるよりは、了解熟知の度に於て勝つて居るのである。他方また、故郷の地域的擴大は、故郷の内容領域にも限定を加へる。本來郷土乃至故郷の内容をなすものは、主として感性的對象特に自然的風物であつたが、感性的個物は多くその不動性の故に、特定の地點に結合され、移動普及の可能性少く、廣い地域に共通になり得ざるに反し、精神的對象は斯る制限を受けること少いが故に、第二第三の他郷にまで共通になり得て、擴大された故郷の主要内容となるのである。

右の如き故郷地域の擴大を具體的に見れば、例へば人が自己が生れ幼年時代を過した村を出て近くの町に移る時、此の村が第一故郷になつて、此の町は第一の他郷となる。次に此の町を去つてその地方の中心都市に轉住すれば、此の都市が第二の他郷となり、出生の村と第一の他郷なる町とを含む地域が故郷となる。更に此の第二の他郷から國の首都に赴けば、第二の他郷を中心とする地方全體が故郷となる。斯くの如き故郷の擴大を順次に續けて行く時は、遂に故郷が自己に屬する國の國土とその地域を同じくするに至る。即ち人が自國を後にしてその外なる外國に出る時は、此の外國には支配せざるが故に、其處に於て否定を受ける行爲様式存在類型また之に對應配與する存在及び行爲にして、假令それが自己の幼年時代の生空間に於けるが如き熟知愛好の度は有せずとも、外國に於て遭遇するものよりは、遙かにそれ等の度のまされるものゝ支配し存在する地域として、

自國の國土の全地域が、擴大されたる故郷となることは、極めて當然且つ必然的である。同様にして斯くて故郷となる自國、他國に於ては見出し難き熟知愛好の高き度を有する自國的なるもの、於てある場所としての擴大されたる自國を、故國と呼ぶことも亦、至當であらう。此の事の至當なるは、既に home, patrie, Heimat 等の言葉が、何れも郷土故郷を意味すると同時に、故國をも併せ意味することによつても認められるであらう。

然らば國に於て、故郷から區別されたる郷土に對應するものは何であらうか？ 惟ふにそれは、己れがそれに於て生を享け育まれ生活し來つた國であらう。此の國に全般的に支配する類型様式は、自己が作れるものに非ずして、自己は之を自己のものとして人となるに過ぎず、之を作れるものは、此の國に過去に住んだ人々の總體である。故に此等の人々によつて作られた類型の下に共屬するもの、於てある國の全地域を、祖國と呼ぶことも亦不當とはされないであらう。此の祖國の外に出て、外國の人となる時、祖國は外國の否定を媒介として故國となり、此の故國に於て、祖國の内容が反省の對象となり、對自的に意識把握されるのである。故國が擴大されたる故郷であるが如く、祖國は擴大されたる郷土である。而して郷土と故郷とがその地域を全く一つにすると同様に、祖國と故國とは、地域的には全く合致する。故郷郷土の考察は、斯くて必然的に故國祖國の考察に導かれる。併しながら此の考察は別の機會に譲り、故郷及び郷土の考察を一應茲に閉ぢることとする。(完)